

一以上の條々は筆者十數年來の實驗により省煩摘要小兒を養育する人の爲めに日々必得方の大要を記ししなり世の育兒者之れに由りて違ふことなくんば庶幾くは愛兒の成育を全うせん

子供は鏡なり

林 ふ み

鏡は、色々のもの、かけをうつししますが、子供もまた、自分に接する人々のかけをうつす一つの鏡であります。

一體、子供のまねをするといふのは、本性ですから自分のそばにある人々の通りするものであります。これが、大人ならば、善惡のわきまへがありますから、たとひそばでして見せられても、よくないと思へばまねません。けれども子供はまだ善惡のわきまへがあり

ません。其上色々の事を知らうとして居りますから何でもまねをするのであります。いくら大人でも、善惡のわからぬ事は、子供のやうにまねすることがあります。例へばこゝに一人の洋食のたべ方を知らぬ人が、よく知つて居る人々とふしよに洋食をたべるとしませう、そうすると、其人は何もかも向ふの人々のする通りにして、事によれば、其人々のしくじりまでもまねるかもしれません、大人でさへかうでありますから、まして、何もわからぬ子供が、まねするのは尤であります。

それ故、もし子供によくない行儀などのあるのを見ましても決してむやみに叱ることは出来ません。よく省みて常にこの子供に見せて居る手本は、どうであるかといふことを考へることが、大切であります。さうすれば、どこかに其手本のあることを知りませう。

そこでまづ手本をなほすべき筈であります。無邪氣に手本にならつて居る子供を叱るのは、實にはずかしい事で、また子供にとつては、氣の毒な事ではありませぬか、

私は三年以上四年までの子供を世話して居ります。この子供達は、これまで家庭にばかり養はれて居たので、幼稚園のやうな社會に出たのは、實にはじめてであります。それ故に、でも保護とカ年上の人々のすることをまねます、處が入園後まもなく、或日共同遊嬉の時、列をつくつて歩かせて居りますと、中に四五人の子供は、くると後を向いて、あとしざりをしながら歩きます。其様子は、ちつともわざとする風はなく實に無頓着でありました。そこであとでなせであるかと考へて見ますと、これは全く、私が先に立て、この子供達をひきぬす時に、子供達の顔の見えるや

うにと思つて、度々子供の方を向いて、あとしざりをしながら歩きましたの、まねたといふことがわかりました。

これは、只わづかの事でありますが、形ばかりでなく、心も、この通りであります。手本がわるくて、鏡によいかげのうつる道理はありませぬから、子供の世話をする人々は、まづ自分から、よくすることが大切ではありませぬか。

子母里そーだん

こにしのふはち

療治よりも豫防が大切だといふ西洋の諺があり、病氣にかかつてから醫者よ薬よとよろたえたりさういふよりも、常に養生して病氣にかからぬよゝにすることがかんじんだとおもいます。